外部委員の意見とその回答

令和２年度運営協議会（令和３年３月５日開催）

■ 委員からの意見

・卒業後に函館に残る学生が少ないため，地元企業への就職を進めてほしい。

□ 回答

・地域連携協力会と連携し，地元への就職を増やしたいと考えている。道外に就職後函館に戻ってくる卒業生もいるので，U ターン就職の需要がある。地元企業と連携した転職受入体制を整えたい。

・特に地元に就職する専攻科生が少ないので，受入企業の開拓や受入環境の整備を企業側に発信していきたい。

■ 委員からの意見

・高専に進学する生徒の学力が低下しているように感じる。高専の学力を維持するのは大変ではないか。

□ 回答

・入試に専願制を導入し，高専への進学意欲のある学生を優先して合格者を決めることとした。合格水準は向上している。

・入学後成績不振の学生に対しては，学習支援室を中心に基礎学力をサポートする体制をとっている。

■ 委員からの意見

・実倍率は 1 倍を切っているのではないかと思うが，今後の高専の維持について危機感や支障をどう考えているか。

□ 回答

・実倍率 1 倍を切る状況ではない。合格水準を落としていないため，年によっては定員割れした学科がある場合もある。

■ 委員からの意見

・私立高校や公立高校のように，中学校に出向いて PR が必要ではないか。

□ 回答

・中学校への広報を強力に推進している。別途興味ある生徒・保護者がいれば，学校を訪問し，説明を行っている。また，生徒・保護者や中学校進路指導教員の学校訪問も常時受け付けている。

■ 委員からの意見

・函館市内の出生数が減少しているため，市外からの学生を集めてほしい。そのために函館市としても連携していきたい。

□ 回答

・同様の問題意識を持っている。道外や函館地域外からの入学生を増やす広報活動に力を入れている。東京での高専学校説明イベントに参加するなど，全国的な広報活動を行っており，徐々に道外入学生が増加している。

■ 委員からの意見

・運営協議会の開催間隔はもう少し短くしてほしい。

□ 回答

・今後検討していきたい。

以上

令和２年度函館工業高等専門学校

運営協議会　議事要旨

日　時：令和３年３月５日（金）１０：００～１２：００
会　場：函館工業高等専門学校　L107（第１講義室）
出席者：（学外委員）
大越　雄司　委員（函館商工会議所産学官連携促進委員長）
川島　眞一　委員（函館高専地域連携協力会会長）
佐竹　　聡　委員（函館市中学校長会会長）
髙久　佳也　委員（株式会社函館新聞社取締役編集局長）
平井　尚子　委員（函館市副市長）
三浦　汀介　委員（公益財団法人函館地域産業振興財団副理事長）
（学内委員）
但野　　茂　委員（校長）
澤村　秀治　委員（副校長（総務担当））
山田　　誠　委員（副校長（研究・情報・地域連携担当））
小林　淳哉　委員（副校長（教務主事））
奥崎真理子　委員（学生主事）
三島　裕樹　委員（寮務主事）
柳谷　俊一　委員（専攻科長）
三浦　哲也　委員（事務部長）
欠席者：（学外委員）
東　　信彦　委員（長岡技術科学大学学長）
漆嵜　照政　委員（函館高専同窓会顧問）
川島　眞一　委員（公立はこだて未来大学理事長）
木村　暢夫　委員（北海道大学大学院水産科学研究院院長）

１．開会

開会にあたり、但野校長から挨拶があった。

２．出席者紹介

続いて，運営協議会委員の自己紹介があった。

３．高専運営状況報告

１）国立高専の状況

但野校長から，国立高専の状況について説明があった。

以下，発言要旨を示す。

まず、国立高専の状況についてご説明します。高等専門学校（以下、「高専」）は、中学校卒業後の 15 歳の学生を受け入れ、実験実習を中心とした５年一貫の実践的技術者教育を行う高等教育機関となります。世界的には高等教育機関とは大学であり、15 歳からの学生を受け入れる高等教育機関は我が国の高専だけです。高専は、中堅技術者の養成を目的として昭和 37 年に制度が創設され、近年では研究・開発・企業を含め、新産業をけん引する高度な技術者の養成を期待されています。

国立高専は全国で 51 校 55 キャンパス、学生数は 55、000 人の大変大きな学校組織です。入学定員は 10、510 名、15 歳人口の約 1 パーセントにあたります。卒業後は 6 割が就職、4 割が進学（大学編入）という状況になっています。

高専は本科 5 年制、専攻科 2 年制で、本科を卒業すると準学士の称号を、専攻科修了すると学士の学位が授与されます。

最近、政府・与党等からの高専への期待は大きいものがあります。社会ニーズを踏まえた「高専高度化推進プラン」が示され、3 つの重点戦略（教育の質保証、特色形成、国際化・情報化）とともに、ガバナンス改革・経営力の強化と施設の整備充実にも取り組んでいます。重点項目のひとつである教育の質保証があります。モデルコアカリキュラム（MCC）を策定し、全国高専で導入しています。本校でもいち早く MCC を取り入れています。これは、教師が「何を教えたか？」から、学生が「何を学んだか？」という到達度重視の教育に転換するもので、各高専カリキュラムの６０～７０％を MCC、３０～４０％を各校の強みを生かした特色のあるカリキュラムに編成しています。MCC は高専教育の質保証システムの根幹を成すものです。特色あるカリキュラムとして情報セキュリティ人材、海洋人材、航空技術人材など新たな産業をけん引する人材育成が全国の高専で進められております。また、各校の特色や強みを伸ばす文部科学省の公募事業として、KOSEN4.0 イニシアティブ事業が実施され、本校も２年連続で２件採択されています。

さらに高専教育を日本の教育制度成功事例として、高専制度を国際展開する取り組みも進められています。モンゴル、タイ、ベトナムへ高専設立の協力体制を進めています。本校はベトナムへの支援協力校になっています。

高専の設備充実については、まもなく高専制度創設 60 年を迎え、老朽化が進む施設をどのように整備を進めるかについて、高度化・国際化に対応しながら具体的に取組が推進されています。一例として図書館など諸室のアクティブラーニング仕様への展開、高専の特徴でもある実習工場の整備、20％程度の割合を占める女子学生の受け入れに向けた整備などが全国で進めてられています。また、各高専には寄宿舎がありますが、国際化を進めるため留

学生との混住型の国際寮の整備も進められています。本校でも現在建設中です。

２）函館高専の状況

続いて，但野校長から，函館高専の状況について説明があった。

以下，発言要旨を示す。

函館高専の状況についてご報告いたします。函館高専は、昭和 37（1962）年に国立高専第 1 期校として設立され、令和 3（2021）年に 60 周年を迎えます。開校時は、機械工学科、電気工学科、土木工学科の 3 学科体制で、その後、昭和 41（1966）年に工業化学科、平成 3（1991）年に情報工学科が設置され、平成 16（2004）年には専攻科が設置されています。平成 25（2013）年には、高度化再編として機械工学科、電気電子工学科、情報工学科を生産システム工学科に、物質工学科を物質環境工学科に、環境都市工学科を社会基盤工学科に改組しています。平成 30（2018）年には、専攻科を生産システム工学専攻、物質環境工学専攻、社会基盤工学専攻の 3 専攻に改組しています。

学生数は現在 925 名、うち 19.9%が女子学生になっています。教員数は現在 70 名在籍しており、うち 8 名が女性教員です。専門教員 49 名のうち博士取得 45 名、実務経験 22 名、一般系教員 20 名のうち修士以上の学位取得者は 17 名です。

入試の状況ですが、2015～17 年は定員割れしていました。2018 年からは改善が見られ、ほぼ定員を充足している状況にあります。特に、2018 年は 346 名の合格者に対し、入学者が 198 名と、毎年 100 名以上の辞退者がありました。函館地域の 15 歳人口減少もあり、本校の入学定員削減について教育委員会等からご意見をいただくこともありますが、高専は、15 歳から 5 年間一貫で教育する高校とは違う学校であることを理解頂いているところではあります。2020 年度から入試制度を変更し、高専に来たい学生を優先して選抜する専願制度を設けたところです。その結果、2020 年度の入試における合格者は 247 名となり、前年と比べて 100 名程度減少しました。また、入学者のうち 70～80%が函館市近郊、20～30%は道内外出身者です。道内外の割合をより増やし全国から学生を集める体制を進めています。

進路状況ですが、本科 70%程度が就職、30%が進学となっています。専攻科もほぼ同様で 70%が就職、30%が進学です。本科の就職先では、圧倒的に企業で、他に官公庁が若干いるという状況です。進学先は北大、室蘭工大、長岡技科大、豊橋技科大が多いですが、最近はこだて未来大学が増えています。主な就職先は、函館に残る学生が 6%、道内が 16%、道外が 76%です。学生の出身とは逆の結果になっています。なんとか北海道に残る学生を増やしたいと考えています。

留学生は毎年数名ずつ受け入れており、2020 年度も 10 名受け入れています。留学生は第 3 学年に編入しますが、卒業後、大半は大学へ編入します。学士の学位取得を目指す学生が多くなっています。国別では、マレーシア、インドネシア、モンゴルからの留学生が多い

状況です。

研究推進と地域連携として、現在函館高専を応援しようと後押ししていただいている函館高専地域連携協力会があります。加盟企業が 113 社で、教員の研究活動にも支援いただいているところです。これほど後押ししてくれる組織を持っている高専は他にはないと考えています。外部資金の受入状況は、毎年 5,000 万円程度です。科学研究費補助金は、全国の中でも低い方でしたが、教員に積極的な申請を促すことにより、2018 年には「函館の奇跡」ともいうべき全国 1 位でした。その後は全国 20 位前後を推移している状況です。近年の外部資金のプロジェクトとして、大きいものはやはり「大学間連携共同教育推進事業（文部科学省）」になるかと思います。これは先ほどご紹介した高専教育の質保証を函館高専が中心となって全国の高専へ広げるという事業です。本校副校長の小林教授が中心となり、高専教育について重要な役割を果たしたものです。さらに「KOSEN4.0 イニシアティブ事業」には 2 件採択されました。現在は「高専と大学の連携教育プログラムの構築支援」が動いています。

国際交流では、フランス・ベルギー・イタリアの 3 か国とは、短期大学相当の学校との交流が進んでおり、毎年短期研修生を受け入れています。東南アジアでは、シンガポールのナンヤン、リパブリックという高専に近い学校と交流を進め、毎年学生の交流を行っています。また、ベトナムの COIT という短期大学とは、高専化プロジェクトに本校も協力しています。東南アジアやアジアの学校へはいかに我が国の高専教育を広められるかが重要です。アメリカ、ヨーロッパの大学等に学生を短期でも派遣することが学生にとってとても良い経験になっています。

本校の運営組織の特徴的なものとして、国際交流センターがあります。本校にはフランス人の常勤教員がいますが、海外交流に関するコーディネータとして学生の海外研修等の活動を行っています。また、シンガポールにも本校の元教員を海外コーディネータがおり、現地の学校との窓口業務にあたっています。続いて、総合学生支援センターについてですが、様々な課題を抱える学生をフォローする体制として、4 室で組織しています。まず学習支援室です。工学系の学校である高専では、理数系の知識をしっかり身につけることが重要です。勉強の進み具合についていけない学生をフォローしていくとともに、習熟度別での対応も行なっています。メンタルなどに不安を抱える学生には学生相談室、女子学生をサポートするための女子学生サポート室、本校に在籍する留学生を生活面からサポートする留学生サポート室があります。

函館高専が、どちらの方向を向いているのかを校長自ら整理し、教職員に示すのが運営方針です。函館高専のブランド力強化を掲げ、「地域に根差した高専」「地域高専から全国高専へ」「地域を国際展開へ」「国立高等教育機関としての高専」を目標としています。さらに高専の取り巻く様々な状況の中、第 4 期中期計画・目標期間（2019-24）中の取り組みの重点項目を、「学校基盤の強化」「教育質保証システム」「教育体制の強化」「全員参加による学生支援」「国際化推進」「研究力強化と地域連携」としています。それぞれの項目をさらに細分

化して、毎年実施項目を箇条書きにまとめており、教職員全体の一体感や意志の共有化を意識づける役割になっています。各項目の達成状況を毎年度総括しています。令和元年度は前113 項目中 104 項目（92%）が実施・達成できている状況です。

近年は、積極的に新聞報道でも本校が掲載される件数が増えてきています。本校のトピックス、学生の活躍等についてご紹介します。

まず、KOSEN4.0 イニシアティブ事業です。「高専－大学・大学院接続システム」について、これは高専にいながら大学院の授業・研究を行うことができるシステムの構築となります。現在は長岡技術科学大学と連携しており、長岡技術科学大学の研究室を本校内に設け、共同・連携研究を進めています。研究の内容は函館水産海洋工学に関連する研究テーマであり、平成 29 年度からの事業です。徐々に成果を上げ始めているところです。もう一つの事業が、函館市や地域に対して本校としてできることを検討する中で立ち上げたもので、北海道大学水産学部やはこだて未来大学と協力し、水産業と工学を融合した水産海洋工学の地域課題に取り組む研究を進めています。成果を全国へ広げていくことを目標としています。

続いて、酒蔵「函館五稜乃蔵」設立連携協力についてです。本日は欠席されていますが、本校 OB でもある漆嵜社長の熱意と函館市の後押しもあり、函館に 54 年ぶりに酒蔵ができる運びとなりました。この酒蔵施設の中に函館高専の「発酵・醸造工学ラボ」が併設される予定となっています。

北大医学部との連携教育プログラムについて、本校専攻科に在籍するとともに北大医学部保健学科に編入し、学士の学位は北大から授与されるものです。本校からも専攻科修了証書授与されますのでダブルディグリー制度となります。ヘルスケアエンジニアリング人材の養成プログラムで、北大医学部保健学科理学療法学専攻に設けます。教育課程のすり合わせ作業を進めているところで、できれば再来年くらいから学生を受け入れることを目標としています。

学生の顕著な活躍として、理系女子実験隊の活躍があります。日産財団リカジョ賞のグランプリを、大学を抑えて受賞しました。大変な快挙となりました。受賞後に今年度初めてガールズオープンキャンパスというイベントを開催し、女子学生も安心して学習できる環境であることを見てもらいました。また、2018 年には高専では有名な全国高専ロボコンで準優勝を収めました。全国高専のデザインコンペティションでは、同じく 2018 年に最優秀賞（経済産業大臣賞）を受賞しています。続いては全国高専英語プレゼンテーションコンテストですが、近年各高専とも英語教育に力を入れておりますが、指導教員の熱意もあり、平成 30 年には文部科学大臣賞を受賞しました。このように女子学生の活躍が目立つようになりました。

施設設備ですが、現在建設中の国際寮新営や図書館の改修を行いました。図書館は、今までの機能とは異なるラーニングコモンズとして、ICT を活用したアクティブラーニング環境を整備しました。

続いて、コロナ禍での感染症対策についてです。2020.2 月に危機管理室を立上げ、いち

早く休校措置をとりました。卒業式を Web 開催、入学式の中止としました。令和 2 年度前期はオンライン授業とし、教職員の在宅勤務を実施するとともに、独自の緊急時対応指針を策定しました。5 月には函館市にマスクと消毒液を寄付しています。保護者懇談会も web 配信しました。6 月からスクーリングを実施しました。地域連携協力会からの特別寄附により寮生を市内ホテルに宿泊させました。8 月以降は、感染症対策を徹底させながら通常授業としています。2021.1 に学生及び、出入り業者の陽性が判明しました。関係教職員は自宅待機とし、部外者の校内立入の自粛を要請しています。最近学生会からのオリジナルマスクが贈呈されました。今年度の卒業式は市民会館で開催予定です。

また資料の表にありますように、2015 年以降毎年、種々の外部評価や審査を受け、現在に至っています。

４．懇談（感想・意見、助言等）

但野校長から，各委員から感想や意見等を含め懇談したいとの説明があり，各委員から発言があった。

以下，発言要旨を示す。

【但野校長】

それではここからは懇談に移りたいと思います。

お一方ずつ感想とご意見をよろしくお願いします。

【大越委員】

お疲れ様です。大越です。

校長先生から函館高専の PR、現状報告をいただき、より一層理解を深めました。私自身、本日は函館商工会議所産学官連携推進委員として出席しておりますが、所属は建設会社でございます。当社でも多くの高専生が活躍してくれていますが、校長から地元に残ってくれる学生が少ないとのお話がありました。これは私どもも大変実感しているところです。先ほどの数字では函館には８パーセントしか残らないとのことでした。優秀な若者が地元の企業に就職して活躍してくれて地域が発展していくわけですから今後も引き続き地元企業への就職を進めていただきたいですし、我々地元企業としても魅力的な企業づくりをより一層進めていかなければならないと思っているところです。今後とも引き続きよろしくお願いします。

【川島委員】

但野校長ありがとうございました。函館地域連携協力会は 2007 年 6 月に設立し、現在まで活動を続けてきました。私も函館高専機械工学科の 11 期生ですが、当初は学校と地域産業を結び付けようという趣旨でスタートした会が、現在は会員数が実は 200 社を超えてお

り、うち地元の企業は約 3 割程度で、約 7 割の道外企業が会に所属しています。一番の理由は、函館高専の卒業生を新入社員として採用したいという思いで入会するという道外企業の意図が非常に強く、卒業生が東京関東方面に流れている実情を考えると反映しているのかと思います。高専は 16 歳から 20 歳までと期間を経て卒業して社会に出ていくということを考えますと、学生の間に東京に行ったことがないという学生がほとんどで、卒業したら東京に行ってみたいという気持ちが、企業の選別よりも非常に強く、東京の企業へ就職するということがあるということもわかってまいりました。一方で東京に数年就職してから地元に戻りたいという学生もおります。そういった学生の受け入れを連携協力会としても進め、地元企業に還元することを対応していけたらと考えています。今月も企業説明会を 3 月 2 日に初めてオンラインで開催しました。100 社限定のところ、100 社を超える応募がありました。オンラインで説明会を行わせていただきました。今後も卒業生の就職を含め、地元企業と協力して優秀な学生の育成に努めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

【佐竹委員】

中学校の立場で、生徒を送る側として少しお話しさせていただきます。高専の就職、進学が充実しているということは中学校には十分に理解されています。しかし、函館市や渡島全体のことを考えると中学生人口がどんどん少なくなっています。それに合わせて公私立高校は間口を縮小していますが、高専は 200 名規模を維持しています。その中で、高専に進学する生徒の学力が低下してきている感じがあります。学生を指導する側として、高専の学力を維持する側として大変ではないかとお伺いします。

もう一つは、実倍率は 1 倍ないし 1 倍を切っている状況ではないかと感じます。実際に受けている子供と入学している子供、合格しても辞退していく子供もたくさんいると思います。その中で現在の教育の実践や未来、高専を維持していくことについて、支障や危機感をどのようにとらえているでしょうか。

さらにもう一つは、今はどこの学校も生徒を集めるのが大変で、以前は私立高校が、現在は公立高校も必死で、今は中学 2 年生を対象に中学校に出向いて PR をしているようです。どこの中学校も実施しているので、中学生向けに高専の魅力を PR していくことも必要なのではないかと感じています。

【但野校長】

ありがとうございます。小林先生、学生の学力低下に対する対応についていかがでしょうか。

【小林委員】

入学者の学力レベルに関していうと、昨年度専願を導入してからかなり持ち直しており、

市内の強豪校のレベルと同等に感じています。我々は合格水準を落とさないために、定員割れになっていました。30 名も定員割れしていたのは、そこまで取ると大変だからということもありました。それが昨年の専願から水準の高いところで合否をつけることができました。B ランクでも落ちる子もいました。実倍率という点でも、専願者は必ず来るという生徒なので辞退しないで、併願者から少し合格させているという状況で数名入学させています。実倍率が 1 倍を切ってはおらず、不合格者も出している状況です。

【但野校長】
入学後の成績不振者への対応についても説明願います。

【小林委員】
学習支援室という組織があり、例えば、数学がとても重要だというところで教員による指導と学生による指導で、レベルごとに指導しているという状況です。学習支援室が成績不振学生をピックアップしていち早くサポートを行っています。

【但野校長】
昔は、留年や退学がすごく多い学校でした。入学してきたからにはできる限りのことはしようとしています。上のレベルは決まっているが、下のレベルも卒業するまでに引き上げてこようと、使命感を持って、せっかく高専に来たわけだから立派な技術者として卒業させるという社会的責任があるという使命感を持って先生たちは対応しています。入学を考えている生徒には安心していただきたいです。
広報について、澤村先生、状況をご説明ください。

【澤村委員】
中学校向けの広報も積極的に推進しています。通常 6 月頃に学校案内の冊子をもって進路の先生にご説明、その後オープンキャンパスや体験入学を経て、夏以降に教員が出向いて学校説明をしています。我々としては一人でも興味がある学生、保護者がいれば、どのような形でも参り、PR を行っています。令和元年は多く訪問しましたが、令和 2 年はコロナの影響で少なくなりました。それでも 30 校ほどは訪問しました。今後も高専に興味があればぜひ説明に伺いたいと考えています。

【但野校長】
佐竹先生、よろしいでしょうか。ありがとうございます。
それでは高久委員お願いいたします。

【高久委員】

説明を聞かせていただいて、知られざる高専の姿を詳しく教えていただきました。ありがとうございました。大変勉強になりました。

お話の中で、高専が国の教育機関として一環とした教育システムをとられて、工学技術者を世の中に送り出しているという現状はよくわかりました。それで函館高専単独で考えると全国的な教育システムの中で、教育の質が担保され、実績を挙げられているところかと思います。函館にある高専としてどう特色を出していくかということについて、水産海洋工学を実施されているということでした。子供を送り出す親の立場から、これから道外からも学生を受け入れなければならない状況を考えると、やはり教育システムに加え娯楽といった文化的なもので日常生活を函館でどのように送ることが出来るのかや、交通機関や住居、物価などといったことを総合的に親御さんに提供されると、選択の一つとして具体性が出るのではないかと思います。その中でご説明のあった学習支援やロボコンなど、課外活動の充実度やヘルスケアエンジニアリングの話からは、函館はスポーツに興味のある生徒も大変多く、医学療法士の道などに興味のある生徒もいると思うので、大変有望かと感じました。あと進路選択先の多様さは生徒と親には大変いいことかなと思います。中学を出て普通なら高校に行くが、高専では中学を出て大学と同じような教育システムの中でどんどん専門的な知識を身に着けていくので、即戦力として大学や大学院にも進めるということをもっと強調すると、専門学校ではないという誤解もすごく解けるのではないかと思います。私の会社にも高専出身者が 1 名いるが、文系と思われる新聞社でも ICT 技術や理系工学系の技術が必要な部署があります。就職先も理系工学系の会社だけでなく、文系と思われる会社にもアプローチすると意外と欲しがるところは多いのでないかと感じました。新聞の電子化のサービスを行う上で理系の人材が欲しくても地元からはなかなか採用できないという実情もあります。そういったところも開拓されてはいかがかなと感じました。

【但野校長】

ぜひ函館新聞社でも高専卒業生をたくさん採用してもらえればと思います。よろしくお願いいします。

それでは平井委員よろしくお願いします。

【平井委員】

いろいろ詳しく聞かせていただいてありがとうございました。函館市として高専の先生には委員会、審議会等で大変お世話になっており、先生方お一人お一人が「まちづくり」という観点で研究されているのをひしひしと感じています。またキャンパスコンソーシアムなどで、校長先生をはじめ大変お世話になっており、非常にありがたい、なくてはならない学校の一つであると考えています。先ほど学力低下の話がありましたが、市としては、函館全体として学力の低下が感じられるかなと考えております。我々の高校時代、市内からも現役で数名は東大に入学していた時代から考えますと、ここ数年は入学していないです。そう

いった市全体の学力低下を考えますと高専の先端的技術や大学との連携の中で引っ張っていただくというのも大切な一つの役割かなと感じています。

そうした中で、200 名の定員の数の話をしていただいておりました。函館の地域を考えますと私立の高校が先を走っていて、その中で公立高校ができて、そして高専ができて、このバランスが街の魅力の一つであるとも考えています。いろいろ工夫をされているところと思いますが、函館市で年間 1600 名ほどあった出生数も 1300 名ほどになり、今にも 1000 名を切る時代になります。そうした中で 200 名という定員がいいのか、それとともにできれば函館市外からの学生をたくさん集めていただく手立てを考えていただければとありがたいと思います。これからもいろいろな場面で連携して取り組ませていただければと考えております。本日はありがとうございました。

【但野校長】

ありがとうございます。定員については、国立の学校のため我々独自で変更することは難しいこととなります。西日本の高専は非常に人気が高く、新たに高専をつくりたいという県もあります。市内の進学校よりも入学レベルが高いという高専もあります。そのような状況の中で函館高専の定員確保が難しいから入学定員を即削減するというわけにはいかない状況にあります。しかし、地域の状況もよく理解しているつもりです。地域に必要とされる人材を育成するという使命をもって地域の学生を対象にしていますが、平井委員がおっしゃったように道外からの学生を増やしたいと考えています。教育はどこの高専でも同じレベルが学べることが特徴ですので関東圏からぜひ函館にとアピールはしています。また、国際交流でもたくさんの留学生の受け入れる体制をつくることも考えています。

それでは、三浦委員お願いします。

【三浦委員】

本日は、函館高専の状況について詳しく説明いただき、よく理解することができました。ありがとうございます。函館高専とのかかわりを考えると 10 年ほど前に 2 度ほど外部評価委員として参加させていただき、今回が 3 度目となります。前回からと比べるとずいぶん活躍されているなと感じます。特に女子学生の活躍が以前はあまりなかったと思い、新しい話だなと感じました。私は工業技術センターにいますが、事務職をふくめ、かなり高専卒業生がいます。私はセンター長として共同研究などの申し込みの際に研究員と面談すると、非常に優秀な方がいます。そういった研究テーマの紹介の中でも、雑談をすると高専に対する愛情が非常に強く、非常に優秀で、高専卒から大学で学位もとり、活躍しています。コロナ関連のものと、それ以前のものの設備の更新で約 1 億 5 千万円の最先端の計測機器が入っていますが、そういった場面でも高専卒業生は大変活躍してくれています。これからもセンターと高専の協力関係を推進していただければと思います。また、5 年もするとだいぶ学校の様子も変わっています。今回の運営協議会の開催は大変ありがたいのですが、もう少し短

い間隔で開催してもらえればと思います。毎年でなくても、もう少し短い間隔で開催してほしい。今後も高専が発展されることを願っています。
　本日はありがとうございました。

【但野校長】
　ありがとうございます。検討させていただきます。
　それでは、本日出席している本校の委員からも一言お願いします。

【澤村委員】
　本日は、但野校長から本校の状況をご説明させていただきました。私は入試広報を担当しております。今年はコロナの影響で必ずしも十分な広報ができませんでしたから、このあとどのように入学生が決まっていくか心配なところです。これからも地域の中学校はもちろん、企業や市民の皆様に高専を知っていただくということをいろんな場面でわかりやすく伝えていくことが必要なのだろうと感じています。函館にいながら高専はどういう学校なのかわからない方がたくさんいらっしゃいます。そういったことを学校としてもしっかり対応していくことが必要だと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。

【山田委員】
　私は研究協力を担当しています。さらにドローンの関係なども担当しています。学生によく言うのは情報技術の発展がものすごく進んでいて、私の機械加工の専門分野の中でも情報技術がものすごく使われているんだということです。このあたりのことを学生に伝え、函館市の将来の姿も併せて伝えていけたらと考えています。今後とも引き続きよろしくお願いいたします。

【小林委員】
　学力レベルの件で、高専というブランドを守るため水準は維持しつつ、学生が入ってきてからのサポートもきめ細かく行えればと思っているところです。実は新年度のフォロー体制も考えているところで、そういった中でも中学校の先生にも信頼してもらえるように努力していきたいです。わたしは、キャリアも担当しており、地元への就職の件は地元企業に申し訳ないという気持ちがありつつ、協力会のメンバーとはいつも話をしています。なんとか地元への就職を増やしていければと考えているところで、協力会の川島会長とともに地元の企業を知ってもらい、なおかつ U ターンも含め就職してもらうという方策を考えていければと思っております。今後ともよろしくお願いします。

【奥崎委員】
　学生主事の奥崎です。皆様のそれぞれの立場の視点、そして親の立場でのご意見、それぞ

れの立場での貴重なご意見ありがとうございました。学生主事としての役割は、勉強プラスアルファの部分、課外活動や学校生活の部分、あるいは学校行事の支援の部分です。皆様の意見を参考にして、学生が毎日来たくなる、行きたくなる学校、卒業してからもいつでも学校に行きたくなる、そんな愛校心の溢れる卒業生をどれだけ送り出せるかというところを頑張ってまいりたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

【三島委員】

寮務主事の三島です。寮務主事という立場でお話しさせていただきますが、全国高専として、道外からたくさんの学生を受け入れるといった時には、ほとんどの学生が寮に入ります。先ほど平井様からもありましたが、外から学生を迎え入れるためには寮での楽しい生活をアピールをするのも重要かと思っております。また、今年のコロナ禍の中、学校の感染対策と別に、寮は生活の場としての感染対策を行いました。寮生には不自由をかけましたが、昨日無事閉寮し、今年度は寮から陽性者は一人も出さなかったということから、寮での新しい生活スタイルを確立できたのかなと考えています。来年度には国際寮の竣工も控えており、そこには日本人の寮生も入ります。多くの函館市以外の寮生に来てもらえればなと考えております。本日はありがとうございました。

【柳谷委員】

専攻科長の柳谷です。専攻科は本科 5 年間を卒業して、さらに専門性を高めるために作られた制度です。特に本校が注力しているのが実践的な技術者の育成で地元の企業の方、退職された方をマイスターとして教育に携わっていただいています。その一方で、地元の企業に就職する専攻科生は少ない状況で、非常にもどかしい思いをしています。今後その点を改善したいと考えていますのでご指導いただけたらと思います。

また、私は生産システム工学科電気電子コースの教員でもありますが、電気電子コースは、実は全国的に人気がなく希望者が少ないです。本校の魅力を中学生に発信するとともに、電気電子コースの魅力も発信していきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

【三浦委員】

本日は、貴重なご意見ありがとうございます。私は、事務部長として事務部からのご説明することといたします。修学環境の整備について、先ほど校長からも説明がございましたが、国際寮の関係、図書館の改修、そして今年度は本校の予算でコロナ対策として、食堂を 3 倍の広さにするということで現在工事をしています。さらに補正予算で旋盤など政府調達になるような予算もついております。事務部としては修学環境の整備として自学自習スペースを増やすなど今後も進め、学生の皆さんに安心して学習していただけるよう整備に努めてまいりたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

【但野校長】

ありがとうございます。最後に、今年度の学生募集のポスターを紹介します。今年度はこの言葉「この街で」を入れました。やはり函館は良い街です。函館の地に高専があるということを誇りに思ってもらえるように学校運営を進めてまいりたいと考えておりますので、引き続きご指導いただければと考えております。

本日はありがとうございました。

５．閉会の挨拶

すべての議事を終え，但野校長から閉会の挨拶があった。

以上